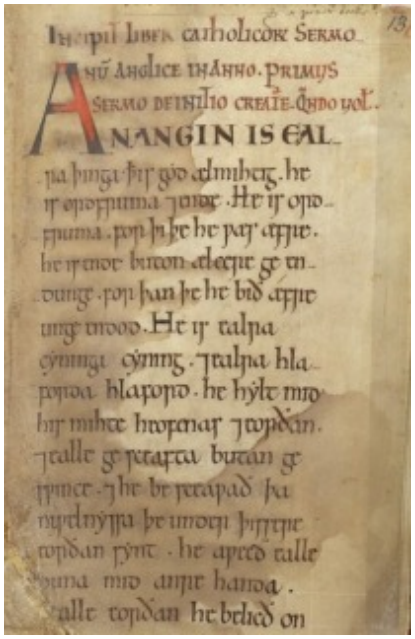
発表要旨

❦

１．後期古英語の受動態における人称性（人称か非人称か）について―とくに *Ælfric's Lives of Saints* をもとに

大野次征（宇部工業高等専門学校教授）

Visser（1973）は、（１）he wæs hrinen 'he was touched'は、能動態が対格目的語を取るときの態（人称受動態）であり、また（２）Us biþ geborgen 'To us is protected' (= we are (will be) protected)なる受動態は、能動態の動詞が与格（Mitchell (1981)は属格目的語を含む）が唯一の目的語の時、このような非人称受動態となるという。（２）の（１）との比較で数量的比重とその意義について調べる。また、対格目的格が phrase（不定詞を含む）や clause のときはその受動態は overt（例えば、clause では、It is p.p. that …）か、covert（is p.p. that …）か、についても調査したい。また、（３）与格目的語(Ic Gode campode 'I fought for God' (B-T))の代わりに前置詞（he for his eđle campode 'he fought for his country' (B-T)）の場合は受動態はやはり非人称の形をとるのかを、*Ælfric's Lives of Saints*（993-998 年間の作、 W-S 語）をもとに検討する。



'Aelfric's Catholic Homilies'
BL Cotton MS Cleopatra B XIII, f.13r

❦

２． Gonville and Caius College, MS 107/176 に見られる *Guy of Warwick* のテキストについて

奥村　譲（富山大学教授）

Auchinleck 写本に見られる *Guy of Warwick* のテキスト（以下、A）は、詩形と内容の違いにより３部に分かれる。このことから、Loomis (1942)はこのテキストがフランス語原典の単なる中世英語英訳ではなく、editor による原本の‘unique manipulation’から生まれたものであると論じた。McSparran (1979)は、この主張には確たる根拠がないとして、この作品の中世英語版を精査する必要を指摘している。

本発表は、この要請に応える研究のひとつとして、Gonville and Caius College, MS 107/176 に見られる同作品のテキスト（以下、C）を調査した結果を報告するものである。テキストの内容と方言的綴り字の調査を通して、① C は別個に英訳された２つの部分に分かれ、それらは A の第１部と第２部と概ね一致すること、② C の第１部では editor の存在が窺われること、③ C の第２部は複数の原本から転写されていること、などを示したい

‘Guy of Warwick’
NL of Scotland, Auchinleck MS. f. 147

r

❦

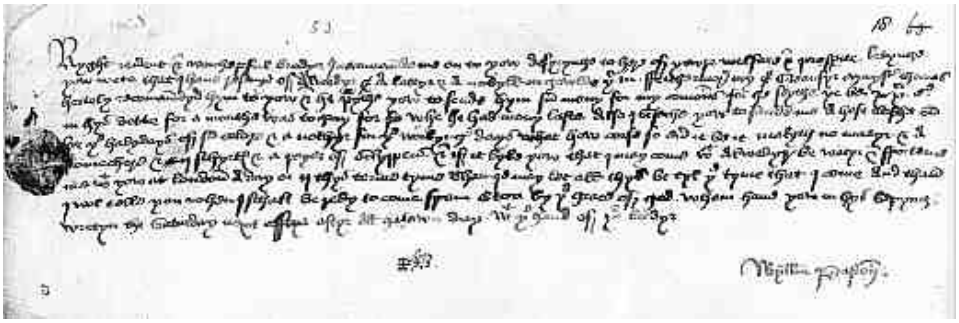
３．『パストン家書簡集』における認識動詞

平山直樹（広島大学大学院生）

think、suppose などの認識を表す動詞(epistemic verbs)は、I think、I suppose などの形で話者の主観を表す際に用いられ、15 世紀を代表する書簡集である『パストン家書簡集』においてもよく用いられている。これらの認識動詞は、Thompson and Mulac (1991: 313)が(1)～(3)で説明しているように、that の有無や I think の移動など文法的まとまりの度合いからも、その主観性の強弱の度合いを知ることができる。これらの例文を見ると、I think には(1)のように文頭で that を伴い、「～であると考える」と話者の主張を字義通りに表すものもあれば、(3)のように文末に現われ、話者の主観的な見解であることを付加するだけの語用論的なものまであることがわかる。

(1) I think *that* we're definitely moving towards being more technological.
(2) I think *0* exercise is really beneficial, to anybody.
(3) It's just your point of view you know what you like to do in your spare time *I think*.

本研究は、Norman Davis 編集のテキスト第 1 巻(1971)を調査対象とし、パストン家の人々が用いる認識動詞に焦点を当て、15 世紀におけるそれらの意味発達の度合いを明らかにし、またそれらが持つ書簡体の特徴の一端を明らかにすることを目的とする。その際、文法化・主観化に関して、Thompson and Mulac の枠組を更に発展させ、以下の 3 つの条件から調査する。①主語の人称や動詞の種類など命題内容に関する条件、②that の有無や文内における移動など認識動詞を含む節に関する条件、そして③送り手と受け手の社会的関係や手紙の意図など語用論に関する条件、である。



BL Add. MS. 27,446, f. 18

特別講演

❦

司会　中尾祐治　（中部大学特任教授）

講師　野口俊一　（大阪教育大学名誉教授）

コミュニケイションとしてのマロリー